

大阪府感染症発生動向調査週報（速報）
2026年 第30週（7月20日～7月26日）

今週のコメント

～手足口病～ 手洗いの励行と排泄物の適切な処理が重要

定点把握感染症

「手足口病 全11ブロックで減少」

第30週の小児科・眼科定点疾患の報告数の総計は2,400例であり、前週比26.5%減であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RSウイルス感染症の順で、定点あたり報告数はそれぞれ5.87、3.07、1.82、0.99、0.57である。

手足口病の報告数は前週比30%減の1,063例で、中河内10.32、大阪市南部7.47、南河内7.00、大阪市北部6.77、北河内6.41であった。前週と比べて、全11ブロックで減少した。

感染性胃腸炎は21%減の555例で、中河内5.47、北河内4.91、南河内3.67である。

ヘルパンギーナは38%減の330例で、大阪市北部3.31、泉州2.75、南河内2.53であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は23%減の179例で、北河内2.00、中河内1.95、泉州1.05である。

RSウイルス感染症は6%増の104例で、南河内1.20、中河内1.11、大阪市北部1.00であった。

新型コロナウイルス感染症は28%減の373例で、定点あたり報告数は1.31である。南河内2.30、北河内2.25、中河内1.48、堺市1.44、泉州1.27であった。

急性呼吸器感染症（ARI）は22%減の8,295例で、定点あたり報告数は29.11である。南河内38.04、北河内37.31、中河内35.83、大阪市北部33.10、泉州29.15であった。

手足口病

(定点あたりの報告数)

ヘルパンギーナ

(定点あたりの報告数)

※2025年第15週以降、定点医療機関数の変動により、警戒レベル・注意レベルの数値は参考値

表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2026年 第30週7月20日～7月26日）

第30週の 順位	第29週の 順位	感染症	2026年 第30週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2025年 第30週の 定点あたり 報告数	2026年第30週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	手足口病	5.87	30%減	0.82	1歳_40%
2	2	感染性胃腸炎	3.07	21%減	3.68	1歳_20%
3	3	ヘルパンギーナ	1.82	38%減	2.16	1歳_28%
4	4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.99	23%減	1.12	3歳, 5歳_13%
5	5	RSウイルス感染症	0.57	6%増	0.53	1歳_49%
参考		新型コロナウイルス感染症 (急性呼吸器感染症定点報告疾患)	1.31	28%減	3.29	1-4歳_25%
参考		急性呼吸器感染症 (急性呼吸器感染症定点報告疾患)	29.11	22%減	32.81	1-4歳_44%

各疾患の詳細は、大阪府感染症情報センターホームページ（定点把握疾患、疾患別情報、病原体検出情報）をご覧ください。

第30週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です



表 2. 大阪府全数報告数（2026年 第30週7月20日～7月26日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています。詳細は感染症情報センターホームページ>【週報】>全数把握疾患 をご覧ください。)

	疾患名 () 内の病型は今週報告分のみ 府内累積報告数の内訳は省略	報告 数	豊 能	三 島	北 河 内	中 河 内	南 河 内	堺 市	泉 州	大 阪 市	府内 累積 報告 数
3 類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	9				1				8	96
4 類感染症	レジオネラ症	1								1	97
5 類感染症	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1				1					48
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	3			1				1	1	33
	侵襲性髄膜炎菌感染症	1								1	7
	侵襲性肺炎球菌感染症	2			1					1	160
	水痘（入院例）	1	1								43
	梅毒	10	1	1						8	741
	破傷風	1							1		4
	百日咳	2	1						1		194
結核 (2026年5月分)	結核 新登録患者数：44名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 12名) (府内累積報告数 337名、内 肺・喀痰塗抹陽性 106名)										

(2026年7月28日 集計分)